

ブルーエコノミーを知る

次世代の環境保全に向けて

近年、世界中で注目が集まるブルーエコノミー。ブルーの「青」は海を指しています。日本ではまだなじみがない言葉ですが、海外ではすでに、私たちの生活に欠かせない海洋生態系を保全する上でカギとなる考え方として定着してきています。ではそれは一体、どのような概念なのか。国際協力ボランティア大垣直哉が紹介します。

深刻化する海洋問題

一人当たり年間53 kg。この数字は何を表しているのでしょうか。世界自然保護基金の報告書（2016）によると、世界では同年約3億9千万トンにもおよぶプラスチックが生産され、この量を世界人口で割った一人当たりの重さが冒頭の数字です。驚愕する量ですが、さらに驚くのは、私たちが普段使うプラスチックのほとんどが、生産から3年以内にゴミとして捨てられ、その多くが海洋に流出しているという点。海に流出したプラスチックはやがて肉眼で捉えられないほどの小さな粒子（マイクロプラスチック）となり、私たちが魚介類を食べることで、一週間にクレジットカード一枚分のマイクロプ

ラスチックが体内に蓄積される計算となるそうです*。

海洋環境の悪化は、プラスチック汚染だけに留まらず、気候変動による海面上昇、サンゴの白化による生態系の損失、海面温度の上昇に起因するスーパー台風増加など、私たちの生活に大きな影響を与えています。果たしてこうした共通の課題に人類が立ち向かう術はあるのでしょうか。

*オーストラリアのニューキャッスル大学による研究
[No Plastic in Nature]

グリーンも、ブルーも

昨今、巷ではグリーンを冠した言葉があふれています。環境保全と経済・社会開発の両立を目指すグリー

ンエコノミーや、環境負荷を少なくして資源の健全な利用を目指すグリーン購入法（エコマーク商品）などがその一例です。ただ忘れてはならないのが、環境保全活動は、私たちが生活する陸地だけに留まらず、深刻化する海洋汚染も踏まえて、包括的に取り組まなければ未来はないということ。そのような背景から提唱されたのが、ブルーエコノミーという考え方です。

ブルーエコノミーとは

ブルーエコノミーの概念は、ベルギーの経済学者グンター・パウリ氏の著書『The Blue Economy』で2010年に初めて提唱されました。ブルーエコノミーが目指すところは、



オイスカもマングローブ林保全でブルーエコノミーに貢献。サイクロンの脅威から村を守ってくれているマングローブ林（バングラデシュ）

将来の人口増加を見据え、地球の7割以上を占めている海洋のポテンシャルに焦点を当て、海洋資源の保全と持続可能な開発を通じて、経済成長につなげることで。同書が出版された2年後の12年にブラジルで開催された「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」が、ブルーエコノミーの重要性が国際社会で認識される契機となり、現在、世界のさまざまな場所での概念に基づいた環境保全活動が展開されています。海洋は、私たちの経済活動で排出される二酸化炭素の30%を吸収しており、世界銀行の報告では、熱帯雨林の5倍以上の吸収能力を持つとされています。海洋保全を進めることは、気候変動対策の一手としても大いに期待されています。

海藻が世界を救う？



①水質浄化作用

農地から海洋に流れた肥料分を吸収して、海洋の富栄養化を防ぐ

②二酸化炭素吸収

二酸化炭素を吸収して、海洋の酸性化を抑える

③再生可能エネルギー

メタンやエタノールを生産できる次世代エネルギーとして注目

カギとなる海藻の力

持続的な海洋資源の開発や海洋環境保全といった分野で大きな役割を果たすと期待されているのが海藻です。世界銀行は、現在の生活スタイルを維持しながら、増加し続ける人口分の食料を確保するには、これから30年の間に、食料生産を70%増やす必要があると発表しています。そのため、海藻養殖への投資は、環境保全に加え、将来の食料需要を満たし、人々の雇用を生む投資先産業としても注目されています。

オイスカの mangrove 造林に関する知見は、「NGO 随一」と自負しています！

オイスカのブルーエコノミーへの貢献

海藻と並びブルーエコノミーを象徴する生態系のひとつが mangrove。多くの魚介類が生息する場所であるとともに、津波などの災害リスクの軽減、エコツーリズムといった側面でも人々の生活に恩恵をもたらしています。また、温暖化の元凶ともいえる二酸化炭素を吸収し、炭素として固定する能力が高いことも知られていますが、これは mangrove の土壌固定能力によるところが大きいと思われます。たこ足の入り組んだ根に代表されるように、不安定な地盤に根づくために生やした特異な形の根により土壌が根の周りに蓄積、形成されていくようです。この土壌中に、木そのものより多くの炭素が固定されるのです。塩水の中の土壌下は低酸素状態に置かれるため、有機物の分解速度が遅いのも要因のひとつのようです。

オイスカでは1980年代後半から mangrove を植え始め、これまでにアジア太平洋各地で累計約8,300haの海岸などを森に変えてきました。今では官民挙げてのエコツーリズムの場として脚光を浴びているサイト、津波から村を守ってくれたサイトなど、各地でブルーエコノミーの代表格としての力を発揮してくれています。



海外事業部
調査研究担当部長
長宏行



広大な mangrove はすべて植林されたもの。中央は現地の政府の協力で設置された遊歩道 (インドネシア)



mangrove 植林により従来の2倍以上の大きさの貝が取れるようになり、生計向上を実現 (インドネシア)



SDGs 達成にも！

ゴール14では、「2025年までに、海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する」が一つの目標として掲げられており、海洋産業の持続可能な発展を目指したブルーエコノミー分野での活動は、SDGsの達成に直結します

フィリピンの海藻について聞いてみました！

レニさんの故郷ミンダナオ島では、海藻の養殖が盛んで、サラダにして食べるだけでなく、乾燥させて粉末状にしたものは、日本の寒天パウダーと同様、「ゼリーパウダー」として売られているそうです。そして、海藻からサンダル、コップなどの日用品もつくっていると聞き、驚きました！海藻をゼラチン状にし、ほかの素材と混ぜ合わせながら、成形するそうです。プラスチックの代替製品としての加工もできる、エコ素材としての海藻をとても興味深く感じました。



中部日本研修センター
レニ・リセンテス



フィリピンで多く生産されている海藻 (セイロンゴケ)



ゼリーパウダー



海藻で作られたサンダルとコップ

